この夏、「白河の関」の和歌を知る

◎特別企画　白河の関にまつわる厳選8首

平安時代の歌人、平兼盛が白河の関を越えた感動を都に伝えたい、という歌を詠んでいるように、白河の関はその機能を失ったあと、「歌枕」（和歌の名所）として文学の世界で生き続け、歌人があこがれる地となり、多くの風流人の心をとらえてきました。

今月号では、白河の関の著名な和歌、著名な人や白河にゆかりのある人が詠んだ白河の関の和歌をご紹介します。

※基本的に『白河市史』五の白河の関の和歌の表記に従いましたが、読みやすいようにひらがなを一部漢字に直しています。
※歴史的かなづかいに関しては、そのままにしています。
※白河の表記は「白川」「白河」両方ありますが、ここでは「白河」に統一しました。

◎平安・鎌倉時代の和歌

平兼盛

便りあらば　いかで都へ告げやらむ　今日白河の関は越えぬと（「拾遺集」）

知人の家で白河の関の屏風絵を見て詠んだ歌とされます。兼盛自らがあたかも白河の関にいるような感慨があふれています。

作者紹介

平兼盛（?～990）三十六歌仙の一人。平安中期の歌人。「兼盛集」などがある。

能因

都をば　霞とともに立ちしかど　秋風ぞ吹く白河の関（「後拾遺集」）

春霞と秋風を詠み込み、京都と白河の間の時間と距離感が巧みに織り込まれています。

作者紹介

能因（988～?）俗名橘永愷。出家し、各地を旅して歌を残す。西行などに影響を与えた。中古三十六歌仙の一人。

和泉式部

行く春の　とめまほしきに白河の　関を越えぬる身ともなるかな（「和泉式部集」）

公卿で歌人・藤原公任の別荘のあった京都・白河の地と、夫が赴任する陸奥の入口、白河の関の二つの意味をかけて詠まれた歌です。

作者紹介

和泉式部（生没年未詳）平安中期の女流歌人で中古三十六歌仙の一人。夫、橘道貞の官名から和泉式部と称されるがのち離別。「和泉式部日記」を記す。

奥州三古関の一つに数えられる白河関は、奈良時代から平安時代に機能していた国境の関で、蝦夷の南下や人・物資の往来を取り締まる機能を果たしていたと考えられています。律令制の衰退とともに機能を失っていきましたが、「歌枕」として文学の世界で歌人のあこがれの地となり、多くの歌に詠まれています。

藤原定家

白河の　関の関守勇むとも　時雨る秋の色はとまらず（「内裏名所百首」）

人の力の及ばない、自然の移ろいで秋が深まりゆくさまを詠んだ歌です。

作者紹介

藤原定家（1162～1241）幼少から和歌に卓越し、19歳で歌が歌集に採用され注目される。のち後鳥羽上皇の和歌所寄人を務めたほか、「新勅撰集」撰者を務めた。

藤原家隆

雪の色は　まだ白河の関の戸に　あけぼのしるき鶯の声（「夫木和歌抄」）

雪の残る明け方の白河の関にも、鶯の声が聞こえて春が訪れつつあるさまを詠んでいます。

作者紹介

藤原家隆（1158～1237）藤原定家と並び称された歌人。「新古今集」の撰者の一人。関跡の従二位の杉を植えたと伝えられる人物。

西行

白河の　関路の桜咲きにけり　あづまよりくる人のまれなり（「西行法師集」）

人のほとんど訪れない白河の関に咲いた桜を詠んでいます。

作者紹介

西行（1118～1190）俗名佐藤義清。もと武士だったが出家。諸国を旅して河内国で没した。「山家集」などがある。

◎白河藩主の和歌

松平直矩

守人も　なき御代ながらいにしえの　その名にとまる白河の関（「松平大和守日記」）

直矩が村上藩主の時代、参勤交代で江戸に行く際に境の明神で詠んだ歌。太平の江戸の世でも、往古の関の名が留めていることを詠んでいます。

作者紹介

松平直矩（1642～1695）白河藩主。徳川家康の曾孫にあたる。直矩の日記は当時の歌舞伎等の記録として貴重とされている。

松平定信

白河の　関路の跡を尋ぬれば　今も昔の秋風ぞ吹く（「退閑雑記」）

能因の歌を踏まえた歌で、訪れた関跡に吹く秋風は昔と変わらないと偲んでいます。

作者紹介

松平定信（1758～1829）白河藩主。幕府老中に就任、寛政の改革を行い、白河藩でも改革を実施。文化人としても多くの業績を残す。

■主な参考文献
『名歌名句事典』（三省堂、平成17年）
国際日本文化研究センター　和歌データベース
清水好子『王朝女流歌人抄』（新潮社、平成4年）

■用語解説　三十六歌仙と中古三十六歌仙とは・・・

三十六歌仙は藤原公任が選んだもので、紀貫之、柿本人麻呂等が選ばれています。その後選ばれたのが中古三十六歌仙で藤原範兼の撰と伝えられます。